# PHOTO ESSAY
## 東広島キャンパスの自然（植物）
## －22－

# ミミナグサ

*Cerastium holosteoides* var. *angustifolium*

文・写真　豊　原　源太郎
Toyohara, Gentaro
（理学部生物科学科分類・生態学講座）

ミミナグサの生育する生態実験園

ミミナグサ
*Cerastium holosteoides* var. *angustifolium*

ミミナグサ

オランダミミナグサ
*Cerastium glomeratum*

## ―田園地帯の指標種―

東広島キャンパスでミミナグサを見つけた。もう滅びてしまったものとあきらめていたが、理学部の南側にある生態実験園で発見された。

野茨に覆われた水田跡を刈払った翌年の春、それは昔の畦道の跡に小さな白い花を咲かせ、三年目の今年にはかなり増えてきた。

ミミナグサはキャンパスの周囲の田園地帯には点々と見られるが、いずれ滅びてしまうであろうと懸念して、教材用にと圃場に移植したが育たなかった植物である。

ミミナグサはナデシコ科の越年草で、葉の形が鼠の耳に似ていることにちなんで耳菜草と名付けられた。あまり目立たない植物であるが、以前は、人里で人間活動による撹乱のある場所であればどこにでも見られたと言う。しかし、明治末期に帰化植物のオランダミミナグサが欧州からやってきて、在来種のミミナグサは駆逐され、都市では滅びてしまい、今では田園地帯の片隅で細々と生き延びていると言われる。

オランダミミナグサはミミナグサと同属の越年草で、春先にミミナグサよりも早くから開花し、たくさんの花を咲かせ、自家受粉によりたくさんの種子をつけるなど、雑草としての性質が強い。

ミミナグサは花の柄が長いことで前種と区別され、花序はまばらで、種子生産量が少ない。種子生産の点では明らかにオランダミミナグサが有利である。しかし、ミミナグサがなぜオランダミミナグサとの競争に負けたのか、本当のところはまだよく分かっていない。

一般に、在来種が帰化種に追いやられる傾向にあるが、それは競争に破れて滅亡する場合と、在来種が単に都市化に伴う強度の撹乱に耐えきれなくて姿を消すのに対して帰化種の方は逆に強い撹乱に適応して繁茂する場合とがある。

後者の場合には、在来種は現在の日本の都会人と共存できなくなってしまったということになる。ミミナグサも、もとをただせば史前帰化植物と言われるものであり、農耕の始まった弥生時代あるいはその後の頃、中国大陸から日本の人里に帰化して定着し、数十年前まで人と共存しながら繁栄し続けてきたのである。

ミミナグサの本当の敵はオランダミミナグサではなく、現在の日本の人であるかもしれない。とは言っても、人がいなければミミナグサも生きては行けない。

人の住まない日本にはミミナグサの育つ自然環境はないのである。帰化植物と人との関係は大体そのようなものであり、悪名高きセイタカアワダチソウにしてみても、人がいなかったら日本には住めない。

いずれにしろ、都市化の進んでいない人里にみられるのがミミナグサであり、田園地帯を指標する植物が、東広島キャンパスの中心部に蘇ってきたのである。そこにはオランダミミナグサも混生して見られるので、競争に関する答も得られるかもしれない。

これからは人里植物のミミナグサと付き合いながら、ミミナグサにやさしい植生管理法を模索し、キャンパスの環境保全を考えていきたいものと思っている。